

アニマルウェルフェア酪農を实践する

「クリーマリー農夢」の営み

滝川 康治 *

牛たちに快適な環境を提供

北海道第2の都市・旭川市の南に位置し、市街地から車で10分余り山あいの土地が広がる上雨紛地区。ここで酪農を営み、牛乳・乳製品づくりも手がける「クリーマリー農夢」は、18年間にわたってアニマルウェルフェア（家畜福祉）畜産を实践してきた牧場である。

規模拡大が進む北海道で最小規模の部類になる、6.2haの土地（借地を含む）で7頭の乳牛（うち経産牛は6頭）を飼う。しかし、ストレスのない快適な環境を牛たちに提供していることでは、この牧場と肩を並べるところはきわめて少ない。

1年中、放牧しているのので、牛たちは好きなときに牛舎に出入りできる。秋の夕方4時ころ、給餌や搾乳の準備が始まった。

「さくら、いい子だぞ。ごはんだよ」

「はる、Q、みんな帰っておいで。（搾乳を）始めるぞ」

放牧地にいる牛たちに向かって、牧場主の佐竹秀樹さん（1957年、旭川市生まれ）が声をかける。登録上のものとは別に季節や顔の形などにちなんだ名前を付けてあり、まるで家族の一員のように牛たちと接してきた。

「名前を覚えていて、呼ぶと私のほうを見てくれるので、こうしているんですよ」（佐竹さん）

次々に牛たちが集まってくる。手作りのフリーストール牛舎には敷料がふんだんに入り、舎内はいつも清潔に保たれている。

搾乳時には、専用のパーラーで1頭ずつ、温水シャワーを使って乳房や乳頭を洗浄し、仕上げに消毒した布巾で拭く。生乳の風味に影響するので搾乳前のディッピングはしない。年間を通して生菌数が100個未満/mlという乳質の良さが光る。



写真1 「クリーマリー農夢」の案内看板。今は7頭の乳牛を飼う。

名著に触発され豪州実習で学ぶ

「ストレスのない環境のなかで家族のように可愛がって育つ牛たちからこそ、人間にとって安全で健康的な乳製品が生まれる」というのが、「クリーマリー農夢」が実践してきた酪農の基本理念である。

もっと多くの消費者にアニマルウェルフェアに配慮した畜産製品の価値を感じてもらおうと7年ほど前から、牧場のホームページに次のようなメッセージを載せてきた。

「最近、家畜たちは産業動物と呼ばれるようになってしまいました。

農畜産物を工業製品と同じように大量生産すれば、生産コストを下げる事はできるでしょう。でも、『生き物を機械と同じように扱っていいのかな?』と思うのです。例えば、一生牛舎に繋がれたまま年1回のお産を強制され、乳量を増やすために高蛋白の飼料を給与され、元来持って生まれた寿命を全うできない生活を強いられています。

ちょっと休ませてあげればまたお産をしたり乳を出せるのに、現状の採算ペースからはずれた牛はすぐに廃用牛として屠殺されてしまいます。

私達は、そのようなストレスの多い産業動物から生まれる食べ物と、ストレスの少ない可愛がられた

* ルポライター・「北海道・農業と動物福祉の研究会」事務局
(Koji Takikawa)

家畜から生まれる食べ物とは違うと考えています。

(中略)牛乳はどれも同じ白い液体なので見た目はわかりませんが、『牛の飼い方の違い』によって、区分けされても良いのではないのでしょうか？

また、私たちは牛が好きで牛飼いになりました。牛たちは私たちのために食べ物を生産してくれているのです。ですから、できるだけ苦痛・苦悩を排除する『アニマルウェルフェア』(家畜福祉)を実践しています。(後略)

この一文に、牛たちに対する佐竹さん夫妻の思いが凝縮されている。

非農家の家庭に育ち、動物好きの少年だった佐竹さんは、高校時代にカウボーイが牧場でギターを弾く洋面の場面を観て、牛飼いの生活に憧れた。

玉川大学農学部で畜産を学んでいた20歳のころ、近代畜産の実態を告発したルース・ハリソン女史の名著『アニマル・マシーン』を読み、畜産に対する考え方が変わった。1960年代半ばに英国で出版され、のちに動物福祉の「5つの自由の原則」を推進する原動力になる同書との出会いは、アニマルウェルフェアに配慮した酪農を始める原点になったという。

卒業後、佐竹さんはオーストラリアに渡り、2年間、30頭ほどの乳牛を飼う近代畜産とは対照的な牧場で働く。乗馬のコーチと酪農、観光体験を兼ねた農場を切り盛りする牧場主は、牛をととても可愛がる人だった。ある時、こう聞かれた。

「お前は搾乳が楽しくないのか?」、「牛と話しながら仕事をするのが嫌いなのか?」

同じ作業のくり返しなので、佐竹さんは搾乳が大嫌いだった。しかし、牧場主の言葉を聞き、酪農は牛と人間との共同作業で成り立っていることに気づく。このやり取りをきっかけに、搾乳を楽しくできるようになった、と振り返る。

オーストラリアでの実習中に大学の同級生だった妻の直子さん(57年、東京都生まれ)と結婚し、同じ牧場で働いて82年に帰国。自分たちしかできない酪農をめざす2人は、北海道内にある製菓会社の農場に勤めた。

原料から製品づくりまで一貫して行うことが会社の理念。ニンニクやハーブの栽培をはじめ、圃場に入れる堆肥づくりのための肉牛飼育、作業機の開発、経理…と、さまざまな業務をこなす。そのかわり、建築や鍛冶屋の仕事、簿記、パソコンなどの研修や免許を取得した。こうした経験は、のちの就農や乳製品づくりに生かされる。

勤務先の農場はその後、牛肉の輸入自由化を機に肉牛飼育から撤退することになり、11年間の会社勤めにピリオドを打つ。いよいよ就農場所を探す日々が始まった。

退職から間もないころ、旭川近郊の町で計画されていた大規模酪農のパイロット事業の計画を知る。総事業費は数億円と高額だが、補助金があるので自己資金1,500万円ほどで牛や新築の牛舎、機械類、住宅が与えられるというもの。佐竹さん夫妻はこの事業に手を挙げ、契約書に捺印する直前まで話が進んだ。

しかし、契約の前夜になり、「これが本当に自分たちの考えていた酪農なのだろうか」と話し合った。

「牛1頭では食べていけないだろうか」と発想を転換し、「補助金ゼロでいこう」と決意。モデル事業への参入を白紙に戻した。

小さな牧場から良質の乳製品を

小規模な牧場を始めるには生乳の付加価値を高めることが欠かせない。そう考えた佐竹さん夫妻は、94年に土地を購入して乳製品づくりに着手し、牛乳とヨーグルト、バターの営業許可を取得。翌年からは近くの酪農家からわけてもらった生乳を加工し、牛乳の宅配を始めた。

97年、生乳の提供者が離農することになり、3頭の乳牛を譲り受けて牛飼いの夢が実現する。

牧場名は「クリーマリー農夢」。牛乳や乳製品の製造所や販売店を意味する英語の「クリーマリー」と、ずっと農業に夢を見ていきたいという気持ちに地中の宝を守る地の精「GNOME」をかけて「農夢」と決めた。

当初から65℃ 30分殺菌のノンホモ牛乳を製造し、長い間、佐竹さんみずから車を運転し、旭川市内の顧客に定期宅配してきた。しかし、毎日の牛飼いの仕事に配達加わる、このやり方は多忙をきわめて体調を崩す。5年前、運送業者に配達を委託する方式に転換した。今は週1回、牧場の近隣地域120軒に牛乳とヨーグルトが宅配される。

自前の小さなミルクプラントでの最大の課題は生乳の安定生産。人工授精による計画出産をめざしているが、1回でも受精が遅れると乳量が足りなくなる。お産の遅れから宅配の顧客を3カ月も待たせたこともある。逆にお産が重なると生乳が大量に余ってしまう、という悩みも抱えていた。

そこで、保存の効く乳製品に加工し、牧場経営が持続できる道を模索してきた。

「大学でバターづくりを研修したけれど、ほかの乳製品は本を読んだりして独学でやってきました。チーズは、自身の体験に加え、子牛の体温、(第4胃の消化液に含まれる)レンネットと生乳、天然の乳酸菌との関係を考えてことが原点です。基本に沿って工夫し、自分のやり方でいいのかどうか、一度だけ宮城県の蔵王酪農センターへ研修に行き、これで間違いないと確認できました」

牧場の開設から今まで、「クリーマリー農夢」の工房で牛乳や乳製品を加工し、販売してきた。現在は、宅配用の牛乳とヨーグルトの製造を基本に、余乳分をチーズや生クリーム、アイスクリームなどに加工し、旭川市内と近隣の町のホテルやレストラン、菓子店あわせて9カ所に卸す。

製品ごとの作業の役割分担について、佐竹さんがこう説明する。

「私が朝の搾乳をしている間、家内が加工の準備を進めます。牛乳とヨーグルトは家内と近所のパートの人で、チーズとアイスクリームは家内と私の2人で、バターは私一人で製造しています」

次のような製品を販売しており、牧場内の直売所「Milk Bar」やHPの直販コーナーで購入できる(注：生産量が少ないため、製品によっては在庫がない場合もある)。

- ・牛乳：900ml 520円(税込み。宅配は割安に)
- ・ヨーグルト：900g 610円(同上)
- ・チーズ：ナッティ、ブルー、カチョカヴァロ、モッツアレラなど8種類。100g 500円～800円(税込み)
- ・バター：手作りバターとガーリックバターの



写真2 多品目のチーズ製品も直販する(ホームページから)



写真3 牛乳や乳製品、お菓子などを販売している「Milk Bar」

2種類。100g 600円～700円(同)

- ・アイスクリーム：200円～250円(同)

「Milk Bar」は、もともと牛乳の定期配達のお客だった野口和美さんが店番と清掃を担当する。「野の花菓子店」の看板も掲げ、手作りのお菓子も並ぶ。野口さんは週5回、夕方の搾乳も手伝う。

「ここは、うちの直売店と菓子店の開業をめざしていた野口さんのお店という、2つの役割を果たしている。お客さんは両方の製品を買ってくださるので、相乗効果があります」(佐竹さん)

アニマルウェルフェアを实践する一方で、衛生管理に心を配りながら搾った生菌数のきわめて少ない良質の生乳を多品目の製品に加工する—大企業がやれないことに着目し、独自の販路を開拓してきた営みから学ぶものは多い。

出入り自由でストレスない環境

「クリーマリー農夢」の牛たちは、放牧地と牛舎を自由に歩き回り、好きなときに青草や乾草を食べる。真冬でも、牛舎と屋外のパドックを往来可能な構造になっていて、牛たちが雪の上で日向ぼっこをする光景を目にすることができる。

手作りの木造牛舎は、冬でも太陽の光が入るように設計した。ベッドに牛が座った際、すぐ目の前になる窓を開閉できる構造にするなど、家畜の快適性に対するきめ細かな配慮が窺える。ゴムマットを敷いたストールに、ベッドは冬暖かく夏涼しい土間にし、敷料の乾草をふんだんに入れる。牛舎の柱にはブラッシングの道具がいくつも吊り下げている。

放牧地の牧草と乾草は自由に食べさせ、非遺伝子組み換え飼料を使う。北海道産の等外小麦やビート



写真4 明るい牛舎のなかでは自由に乾草を食べさせる



写真5 牛舎のベッド前方の窓(右下)は開閉でき、牛たちは外を眺められる

パルプ、ヘイキューブ、配合飼料を与え、全体の80%以上を道産飼料で占める。採草場がないため、乾草は近隣から購入してきた。1頭あたり平均乳量は7,200kgほどを保っている。

8年前、NHKの番組で牧場の様子が全国に放映されたことがある。牛たちは当時、個体識別のための耳標を外していた。数時間後、テレビを見た農政事務所の職員が耳標の装着を要請するため牧場にやってきた。

「牛の耳は、放熱をしたり、虫を寄せつけないようにする役割を持っている。小さなICチップを埋め込んで個体識別する国もあり、両耳に大きな耳標を付けるのは疑問。装着の際に傷がつき、耳がただれるといった問題が起きる可能性もある」

という理由で、耳標を外していたのである(注:牛の出荷時には装着していた)。

そんな事情を説明する一方、「耳標を小さくしたり、ICチップを導入するなど、アニマルウェルフェアの考え方を採り入れたシステムに改善してはど

うか」と文書でも提案したが、農政事務所は聞く耳を持たなかったという。

結局、顧客に迷惑をかけると判断し、耳標の装着を余儀なくされた。「クリーマリー農夢」は飼養頭数が少なく、個体識別は容易にできる。農政事務所の対応は杓子定規なものであった。佐竹さんは今でも、「牛が可哀相なので、耳標は半分の大きさでいい」という思いを抱いている。

丁寧に牛を飼い10産をめざす

「1頭の乳牛からは、1年1産で10産とらないと一人前の酪農家になれない」と、佐竹さんは学生時代の恩師から教わった。生乳生産量の偏りを少なくするため、受精時期を遅らせることもあって教えどおりにはならないが、丁寧に牛を飼う。現在は、6頭の経産牛のうち7産と9産が半数を占め、残りは最近導入した牛たちである。

しかし、愛情を込めて育てても、最後は屠場に送るときがやってくる。妻の直子さんは最近、牧場HPのなかで次のように記した。

「先日、9年間我が家で生まれ育った愛牛『なな』が乳牛としての役目を終えて出舎しました。小さい頃から自分を牛とは思っていなく、世話をしているとお父さんにいつも付いて歩いていました。『なな』は本当に優しい性格でした。普通新しく導入した牛がやって来ると、前からいた牛は新しい牛をのけ者にしようとします。しかし、『なな』はいつも近づいていって、優しく舐めてあげていました。

牛だけではなく、犬の『ぼー』、猫の『にょんにょん』もいつも舐めてもらっていました。(中略)誰よりも母牛の側で寝ていた娘の『ばなな』は、もう10日も経つのに元気がありません。

『なな』がいなくなってしまう、私たちの心に、そして牛舎にもポツカリと穴が空いてしまい辛い毎日ですが、『なな』は私たちに牛乳だけで無く、たくさんの幸せもくれたので感謝の気持ちで一杯です(15年7月の「農夢だより」から)

牛は家族の一員だが、「(酪農は)あくまで産業であり、全く乳が出なくなったら廃用にする」と佐竹さん。一方で、牧場を支えてくれた牛の系統を残したいとの思いも強い。「今も(4つある乳房のうち)2分房を切除した牛を飼っていますが、たとえ雌が生まれても廃用にはしないでしょう。そこが単なる

産業とは違うところかな」と続けた。

搾乳体験や見学者の受け入れも

「クリーマリー農夢」は、(一社)中央酪農会議の「酪農教育ファーム」に登録されており、搾乳体験や見学者の受け入れにも力を入れてきた。

一緒に夕方の搾乳などを行う体験学習(夏場のみ実施)が好評ようだ。1,200円の体験料を受け取り、牛乳とお菓子を提供する。14年は、地元の小学生たち44人(2件)と、個人・家族で33人(11件)を受け入れた。後者のほとんどが旭山動物園の帰りに立ち寄る本州の人たちで、夏休みの時期は予約が殺到する。

搾乳体験を続けてきた一番の理由は、参加者から「牛が可愛かったね」という言葉が返ってくるからだ。飲んだ牛乳は目の前の牛から搾ったと説明することで、より身近に感じてもらえる。

「参加者から、『実際の動物に触れられて、動物園よりも良かった』、『もう何か月も経つのに、子どもが食事のときに搾乳の話をしてます』というお便りをいただくこともある。撮影した動画を編集し、DVDを送ってくれた人までいました」

と、佐竹さんは手応えを感じている。

家畜福祉に関心を持つ人たちの見学も受け入れてきた。アニマルウェルフェアの普及や、さまざまな牛の飼育方法があることを消費者に知ってもらうのが目的。14年の見学者は100人ほど(13件)で、その多くは道内在住者。なかには、日々の仕事のあり方に悩む若い獣医師が、解決の手がかりを求めて訪れたこともあった。

見学者の一人で、三浦半島の耕作放棄地に牛を放牧し、搾った生乳をチーズに加工・販売する小さな牧場を創ることが目標という、帯広畜産大生の伊藤野晴さんは、こんな感想を綴った。

「……『アニマルウェルフェア』という言葉が教科書の上の文字ではなく、自分の目の前にある、そう感じました。それは特別なことではなく、自然なことで、家畜にストレスなく生産された畜産物を食べることは私たちの健康と幸せ、ひいては日本がもっと豊かになるカギになるのではないかなと感じました。(中略)」

クリーマリー農夢牧場の見学会は、私にとってとても大きなものとなりました。そして、こんなにアニマルウェルフェアに配慮した牧場が日本にあるのだ、と安心しました。日本全国の畜産のすべてが当たり前前にアニ



写真6 搾乳体験は子どもたちに好評だ



写真7 低温殺菌・ノンホモ牛乳を試飲する見学者たち



写真8 体験に訪れた子に哺乳の様子を見せる佐竹さん

マルウェルフェアに配慮し、その畜産物に対して適正価格が支払われたら、日本は物質的のみならず精神的に豊かになるのではないかと思います。(後略)」

(地球生物会議発行『ALIVE』2014年秋号)

「クリーマリー農夢」は、アニマルウェルフェア畜産を進めようとする人たちに対する、モデル農場の役割も果たしている。

AW 認証や放牧地の充実へ意欲

佐竹さんは、畜産農家や研究者、獣医師、消費者・動物保護団体の関係者らが集まり、14年5月に発足した「北海道・農業と動物福祉の研究会」（瀬尾哲也代表・会員56人）の主要メンバー。同会の催しでこれまでの実践を紹介する一方、学習会の会場に牧場を提供することもある。

アニマルウェルフェア（AW）畜産食品の認証システムの創設をめざす同会は、乳牛の認証基準の作成を皮切りにして、認証農場の畜産物を食卓に届けるための方法などを検討中だ。

「付加価値の高い製品にすることで、生産者の動機づけになるのではないかと。認証マークを付けることで、同じ牛乳でもいろんな飼い方があることを消費者に知ってもらいたい」

と、佐竹さんが期待を込めて話す。

牛飼いの夢を実現してから18年の歳月が流れ、アニマルウェルフェアに配慮した小規模酪農と生乳の加工・販売を軸にした経営は、建設段階から成熟期へと向かっているように映る。

今後の課題は、放牧地を充実させ、有機酪農への転換を進めていくこと。手始めに今春、牛たちの放牧場になっていた裏山の木を伐採し、心土破碎や堆肥散布をして、牧草の種子を播いた。

「いい草地になったので、これからも草地管理を徹底していきたい」（佐竹さん）

「クリーマリー農夢」を切り盛りしてきた佐竹さん夫妻は、あと数年で60歳になる。ストレスのない環境で丁寧に牛を飼い、健全でおいしい牛乳・乳製品を消費者に届けてきた酪農経営を将来、誰に託すのか―後継者問題も課題のようだ。